

西欧における日本文学研究の現状について

— 方法論を中心として —

鷹 津 義 彦

当初の計画が北米・西欧における諸大学・研究所を歴訪するものであったにもかかわらず、主として西欧に限定されるにいたりましたのは、健康上の理由から旅程を変更せざるをえなかつたという、私的な事情によるものであることを、お許し願わねばなりません。北米では、^①プリティッシン・コロンビア大学のアジア研究所、^②カリフォルニア大学の東洋語学部、^③シカゴ大学の極東言語文化研究所の三大学を訪ねたにすぎませんので、概括的な問題に言及しうる立場にないことはいうまでもありませんが、私の関心をひいた二・三の点をあげることで、責めをふさぎたいと思っています。プリティッシン・コロンビア大学における日本文学の講義は、古典と近代との二つに大別されていますが、古典担当のレオン・ゾルブロッド教授の講義概要は、古代から近世を二九講に分ち、それぞれの作品の歴史的・社会的な把握を透して、日本文学の全体像を浮かびあがらせることに心を砕いています。ことに、

各講ごとにかかげられた英訳文献は、英語圏における主要著作を網羅し、私たち日本の研究者にとっても教えられるところ多なものがあります。しかし、その文献紹介を見ましても、近時の業績は、^④ドナルド・キーン教授の世代とその早い時期の弟子たちにとどまっていることを知りえますが、^⑤シカゴ大学の若い研究者もまた、日本文学を志望する学生数がむしろ低下していく傾向を指摘していました。北米西部の大学に、東南アジアの留学生が多数在籍しているにもかかわらず、彼らが日本語の履修にすらほとんど関心を示さない事実とあわせて、私たちの自省を促すべき現象でもありましよう。

西欧における日本研究は、北アフリカ・中東をも含めた、広義の東洋研究の一部門として位置づけられてきた、長い歴史をもっています。私が訪問した大学でも、^⑦ロンドン大学の東洋アフリカ学部・^⑧ケンブリッジ大学の東洋学部・^⑨パリ第三大学の東洋言語

文化研究所・第七大学のアジア東洋言語文化学部などはその典型でありましょうが、より狭義の東アジア研究所または講座の名称は、ベルリン自由大学・コペンハーゲン大学・オスロ大学に見られます。直接日本学研究所を冠したのはライデン大学であり、ボン大学では日本学講座と東洋語講座とが併設されていますが、ハンプブルグ大学では日本語・日本文化講座と細分化されていました。しかし、日本を冠していても、地域的には朝鮮と一括されているのが通例であり、ライデン大学ばかりでなく、パリ第三大学の東洋言語文化研究所においても、両者をあわせて一部門を構成しているのがあります。

これらの学部・研究所の名称からも知られるとおり、日本に関する研究は、多くの場合、言語と文化とに二分されています。文化の概念には、文学・歴史・宗教などが包括されていますが、なかでも、文学は言語と密接にかかわり合うだけに、その主軸を占めています。したがって、言語と文学とのかかわりをどのように捉えるかにより、日本文学への接近の仕方がかなり変わってきます。このことを第一の問題とすれば、つぎに、日本への問題意識が、異質な文化への興味に発しているのか、現実的な必要性にもとづくのかによって、その認識の方法に大きな差を生ずるのは当然であります。すでに、ブリティッシュ・コロンビア大学における日本文学の講義が、古典と近代とに大別されていることにもふれましたが、両者の歴史的関係の把握は、海外の研究者にとり、私たちに以上に困難な課題でありえます。最後に、言語と文学、古

典と近代という、いずれの課題にも共有な、研究指導体制と文献との問題にふれる必要があります。以下、この三点について、要約したいと思います。

一

外国の大学における日本研究が、まず最初にことばの習得から入らねばならないという制約があるかぎり、言語の問題は、日本語教育と日本語研究との、二つの目的意識を同時に満しうるものでなければならぬ宿命を担っています。

研究の出発点をなす日本語教育にしても、その教育内容以前に、担当者の在り方が大きな比重を占めることも避けられない事実であります。多くの大学では、常勤または非常勤の日本人教師がその任に当たっていますが、日本語教育の専門家による講義例——ブリティッシュ・コロンビア大学——はきわめて少く、おそらくは英語圏にかざられた現象であるかに思われます。パリ大学ではフランス文学専攻、ボン大学ではドイツ文学専攻の日本人教師が招聘され、日本語教育を担当するのが通例となっています。この事実には、私たちの国の研究者が、フランス語またはドイツ語でもって日本語を講ずるにたる、語学的能力を欠いていたという、旧制以来の外国語教育の偏向に起因するものでありましょう。滞在国のことばに通じた文学専攻の日本人教師が語学教育を分担し、反対に、当該国における日本研究の専任教師が兼任するもの、しばしば見られる形であります。いずれにせよ、日本語教育担当者の多

様さは、そのまま、教育内容の多様さに通じるものであります。

この事実はまだ、学部・研究所の規模、日本語を履修する学生数とも、密接に関連しあつた問題であります。私の知りえた範囲でも、小は一〇名前後のオスロ大学から、大は五〇〇名をこえるパリ第三大学まで、その差はあまりに多きに過ぎます。語学教育と文学教育との接点を求めようとする視点も、多岐にわたる現状を前にしては、たんにその外貌をしるすにとどまらざるをえないのであります。

日本語研究の分野では、言語と文化という二つの講座をもつたハンブルグ大学は、私たちの国の旧制帝国大学の組織を彷彿させるものがありました。同大学のベンク教授・ジュネーブ大学のハイネマン教授をはじめ、言語学の基盤にたつた研究法は、はなはだ示唆に富むものであります。ただ、専門外の私の要約しうるところでないことを残念に思います。ただ、日本における母国語の研究が、言語学としての理論的基盤と比較言語学の視野を軽視する傾きがあるとすれば、かえつて、国際的に孤立化していくことを免れないのではないかと、懸念を表白するにとどめましょう。

二

さきに、日本研究に携わろうとする人たちの問題意識が、その研究対象を規定し、研究法を左右するにいたる事実を指摘しましたが、この論題は、文学のみならず文化のすべてにかかわりうる可能性をはらんでいます。ベルリン自由大学では、若い研究者や

学生の関心が、明治以降の近代化の過程に集中し、むしろ社会学への連帯感を強めていく傾向にある由です。そこでは、たしかに、ハンブルグ大学のベンク教授が危惧したように、問題意識の拡散が、学問としての方法論を見失わせる危険性を内包しているかに思えます。しかしながら、パリ第三大学で日本の通史を担当するビエ教授も、学生に見られる近代への関心の大きさに比し、教授陣の専門領域が古典にかたよりすぎている矛盾をあげています。私たちは、外国の学生の問題意識をとりあげる場合、日本の大学における学生の撰択が近代に集りやすいというのとは、また違った意味で、実用的な要素が多分に働いている可能性を、否定することはできません。日本研究が、卒業後の社会でほとんど対価を生まない、オスロ大学での履修者数がきわめて少いばかりでなく、ストックホルムの大学でも、この七五年度に始めて日本学の講座が正式に開設されるというのも、その証左でありましょう。とにかく、古典と近代との比重のおき方は、たんに研究領域の問題として見るべきではなく、西欧における日本研究の歴史的な経緯と、切り離しては考え難い側面をもっているかに思われます。ロンドン大学のオニール教授・パリ第三大学のシーフェル学長・ボン大学のツァーハルト教授・ライデン大学のフォス教授など、私の面接しえた著名な古典学者は、いづれも、その国の紳士の典型として映りました。私たちの国に類比を求めるとすれば、戦前大学の教壇にたつた、英・仏・独文学の教授たちを彷彿させるものがあります。西欧における中産階級として、体質化された豊かな

古典的教養が、日本文学伝統のうちに、共感の対象を見出したとでもいふべきでありましょうか。

もちろん、戦後の世代に、古典研究者が育ち難いなどいおうとしているではありません。欧米において日本文学研究を志す人たちは、母国における大学または大学院の課程を終えたのち、渡日して研究に従事する手段をさがすのに腐心しています。日本政府の国費留学生、あるいは母国の在日公館に勤務できる数はきわめて少なく、戦後急増した日本の大学で母国語を講ずるかたわら、研究に従事する機会を求める人が多いのが実状なのです。在日中に古典にひかれ、帰国後その研究を発展させている何人かの人たち——近世読本（きんせいよほん）研究のゾルブロッド教授、お伽草子のピジョ（ピジョ）講師（パリ第七大学）——を知っています。ロンドン大学・大学院生の演習でも、日本留学の体験をもった二人が、六世市川団藏の芸談、白隠和尚の歌集について発表するのを聞く機会をえました。しかし、戦前の世代の古典観——とくに宫廷文化と仏教という二つの観点——が変質し、近代との間に歴史的な接点が求められるであろうことは、予測するに難くはないかと思われまます。

その具体的な例証として、（パリ）高等研究院のフランク教授の講義をあげることができます。仏教研究の専門家である氏は、前の日仏会館長として知られていますが、大和物語の平中（へいちゅう）の段を講じながら、方違（かたがた）えの論に及んでいました。仏教史のみならず広く民間信仰をも踏まえた古典への接近法は、たしかに、西欧における古典研究に新しい裾野をひらくものでありましよう。事実、氏の

西欧における日本文学研究の現状について

聴講生で、渡日をまじかに控えた一人は、柳田学・折口学への関心を熱っぽく語っていました。ひるがえって近代については、パリ第三大学（パリ）オリガス教授の、フランス文学から日本文学へ向けての比較文学研究が、きわめて示唆に富むものであります。フローベルやブルーストなどの著作から、漱石以下の近代作家に肉迫しようとする視点は、反対の側にたつ、日本の比較文学研究者にとっても看過することのできないものとなりましよう。

ピエ・オリガスの両若手教授が所属する、東洋言語文化研究所では、日本文学史の著者でもあるシーフェル学長の主宰のもとに日本に関するアンシクローペデー——百科全書——編纂の企画が進行しています。（マルセル）グラネ教授の業績で知られた、東洋語学校以来の研究史の蓄積のうえにたつて、現時点での日本学を総合しようとする試みは、たとえそこに、文化と歴史との全般を貫く論理的な整合性を期待することは困難であるにしても、そのもたらす意義において多大なものがあると考えられます。このような包括的な企画が可能になるのは、中央集権色の濃いフランスの大学の特質でもありましようか。その点、各州大学の独立的色彩の明白な西ドイツとは、好対蹠をなしているかに思われます。

三

日本文学の指導体制については、日本語教育の場と同じように、その教授陣容に依りて、各大学間の差は著しいものがあります。なおかつ、それぞれの国の教育事情に精通するものでなければ、そ

の当否をあげつらう資格をもたないこともまたいうまでもないでありましょう。しかし、私の知りえた狭い範囲でも、ロンドン大学とパリ大学との大学院における演習が、たまたま、同じ形で行われている事実には深い興味をおぼえました。それは、院生が各自撰んだ主題を、大学院に在籍する全院生ばかりでなく、専攻に属する教員すべての出席のもとで、発表し討論に附すという手続きを内容としています。そしてこの演習が、大学院における教育・研究の中軸として位置づけられているという点においても、両大学共通でありました。私たちの立命館大学文学部においても、大学院の研究指導を両大学と全く同一形式で行っていますが、ともに大学紛争の体験をへたのち、東西の大学が到達しえた結論が、あまりに附合していることに一驚せずにはいられません。結論が一致しているということは、旧来の大学教育の在り方ばかりでなく学生の要求までが、同じ質のものであったことを意味しているからであります。

西欧における研究文献につきましては、国文学資料館の調査をはじめ、二・三の専門分野の研究者の報告もありますので、改めて多言する必要はないかと思われまます。日蘭交流の貴重圖書を多数架蔵しているライデン大学のような特殊例は別にしても、欧米でも規模が大きく歴史の古い大学では、日本の大学に匹敵する蔵書を有しているのは通例であります。なかには、ブリティッシュ・コロンビア大学²³のアジア研究所図書館のように、明治以降の刊本に偏っている場合があるにしても、向後、資料館を中心としたマ

イクロ・フィッシュ、マイクロ・フィルムの交換が促進されさえすれば、内外の差は、国内の地方差同様、急速に縮まるものと予測されます。ここでもまた、私の専攻にひきつけて附言することが許されるならば、ケンブリッジ大学の中央図書館で、外国人の手になる日本文学史の最初の著者アストンの蔵書に巡り会えたことが、最大の収穫でありました。彼が東京滞在中に蒐集した、近世末期の版本——洒落本・滑稽本・人情本から正本・狂言本——の類が大きな部分を占めています。書目が未整理のため、彼の文学史記述との関連を跡づけることは困難な段階にあります。その多くは、個別の関心に発したというよりは、一括購入の所産であるかに見うけられます。

海外における日本研究の課題としては、文献による情報交換よりはむしろ、研究者の交流人事の面に、隘路が残されているかに思われます。問題を日本人教師の招聘・派遣という方向にしぼりまして、ロンドン・ケンブリッジ大学と東京大学、ボン大学と国学院・東京教育大学の例に見られるごとく、特定の大学間の結びつきに頼る比重が大きばかりでなく、その交流も、ほとんど東京の大学在職者に集中しているという事実があります。それは必ずしも、日本の学会の現状にそくしているとはいえないばかりでなく、海外の研究者に、日本研究の全体的な視野を見誤らせる危険性さえはらんでいます。それにもかかわらず、私は、海外における研究者の、よき相談役・助言者の適例を知ることができました。その人は、パリ大学都市日本館長であると同時に、多年、

東洋言語文化研究所の外国人教授の職をかねている森有正氏であります。在パリの日本研究者は、氏を中心とし交歓し合う機会と場とをもちつことが慣例となつてゐる様をうかがいます。日本語・日本文学の学会関係者が深く自戒することともに、文化の交流にかかわる諸機関もまた、留意するべき課題でもありましよう。

- ① University of British Columbia Department of Asian Studies
- ② University of California (Berkeley) Department of Oriental Languages
- ③ University of Chicago Far Eastern Languages and Civilizations
- ④ Leon M. Zolbrod
- ⑤ Donald Keene
- ⑥ Clifton W. Royston, Eric J. Gasglott
- ⑦ University of London School of Oriental and African Studies
- ⑧ University of Cambridge Faculty of Oriental Studies
- ⑨ Université Paris III Institut National du Langues et Civilisations Orientales Département Corée-Japon
- ⑩ Université Paris VII Langues et civilisations de l'Asie Orientale Section de japonais
- ⑪ Freie Universität Ostasiatisches Seminar
- ⑫ Ost Asiatisk Institut
- ⑬ Ost Asiatisk Seminar
- ⑭ Japanologisch Institut
- ⑮ Universität Bonn Japanologischen Seminar Seminar für Orientalische Sprachen
- ⑯ Universität Hamburg Seminar für Sprache und Kultus Ja-

西欧における日本文学研究の現状について

paos

- ⑰ E. Wenck
- ⑱ Université de Genève
- ⑲ Robert Heinemann
- ⑳ Debet Foljanty
- ㉑ Michel Vié
- ㉒ T. G. O'Neill
- ㉓ René Siefert
- ㉔ H. Zachert
- ㉕ Frits Vos
- ㉖ Jacqueline Pigeot
- ㉗ Ecole pratique des hautes études
- ㉘ Bernard Frank
- ㉙ Jean Jaques Origas
- ㉚ La Littérature Japonaise
- ㉛ Publications Orientalistes de France, 1960
- ㉜ Marcel Granet
- ㉝ Asian Studies Library
- ㉞ University Library Cambridge
- ㉟ A History of Japanese Literature W. G. Aston William Heinemann, London, 1899

(たかひ・よしこ 本学教授)